Rio
http://yahagigawa.jp

豊田市矢作川研究所 月報

◆川づくり政策の原点
◆川づくり～川と向きあうことの覚悟
◆川づくりへの挑戦
～第二ステージの主役をめざして
◆表紙の写真

豊田市矢作川研究所
〒471-0025
愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860　FAX 0565-34-6028
e-mail yahagi@yahagigawa.jp

2007.09　No.112

川づくり政策の原点

森岡泰裕

東京の霞ヶ関で、無機質なビルに囲まれて仕事をしていると、２年前までの豊橋河川事務所勤務時代のことをよく想い出します。

今の仕事は、河川環境に関する予算や事業の制度設計など、格好良く言えば「川づくり政策の企画立案」となります。しかし、国土交通省が担当する、河川や道路、まちづくりなどは、地域の方々の安全・活力・環境を向上させるために行うものであるが故、現場ニーズにマッチした政策でなければ意味がありません。担当官それぞれが、政策の枠組みを考えるときには、それぞれが縁のあった現場をあれこれ思い浮かべるものです。

私の場合、デスクで思い浮かべる水辺は、生まれ育った琵琶湖、役所に入ってから勤務させて頂いた、利根川、小貝川、狩野川、そして豊川と矢作川です。この政策を矢作川に適用したらどうなるだろう…流域の皆さんは喜ぶだろうか…川会議や漁協の方々は…。

国土交通省では、平成２年から「多自然型川づくり」を始め、昨年レビューを行いました。いくつかの成功事例や多くの失敗事例を振り返り、多自然という「型」はない、川ごとの特性を現場で判断し、川本来が有するダイナミズムを活かすことが大事だ、と考えました。そして、河川に何らかのアクション（改修工事、災害復旧、維持管理など）を起こす場合はすべて「多自然川づくり」を行いましょう、という方針を昨年秋に打ち出しています。

「河川環境の整備と保全」を河川法の目的に加えてから10年経過した今年、いいニュースがありました。７月末に兵庫県豊岡市の円山川でコウノトリが46年振りに自然界で巣立ちしたのです。国土交通省では、直轄河川である円山川で野生のコウノトリを復活させるための「自然再生」事業として、餌場となる湿地の再生や魚道の整備などを行ってきています。

環境面では矢水協の活動など最先端の取り組みを行ってこられた矢作川、今後も多くの関係者の議論のもと、天然アユが棲み人々が憩う、全国の範となる自然いっぱいの矢作川であってほしいと思います。

最近の天候は変だ、と思われていませんか？　７年前の東海豪雨でも、直前まで渇水だったにもかかわらず、未曾有の大洪水になりました。局所的な集中豪雨は、今年も全国各地で散見されます。気象庁データからも、集中豪雨が増える一方、降らないときは全然降らない、といった両極端な傾向が見られます。「国を治めることは水を治めること」。古来、為政者は治水のためにさまざまな工夫を凝らしてきました。しかしながら、まだまだ毎年のようにどこかで水害が起きており、事後対応でなく水害を未然に防ぐことが求められています。

ただ、残念なことに、今の治水予算は半分以上が水害が起こった箇所の後追い対応に費やされています。予防的治水対策についても、予算を重点投資し、工夫を凝らして進めたいものです。計画的な堤防の強化や洪水調節施設の建設などとともに、例えば土地利用の在り方を治水の面から見直してみる、危ない土地には建築制限をかけたりため池を保存したり、そういう発想もあってしかるべきでしょう。豊田市にあてはめてみれば…皆さんはどう考えられるでしょうか。

思うところをまとまりなく綴ってみました。川づくりは、川ごとの個性を無視して全国一律に考えることはできません。私が考える川づくり、その原点のひとつが矢作川です。

矢作川応援団の一人として、矢作川大好きな皆さんの調査や研究、熱い議論が進められ、そして地域に愛される川づくり、安全な川づくりが矢作川で進められることを、現地から離れた霞ヶ関から祈念しています。

（もりおか　やすひろ、
国土交通省河川局河川環境課 流域治水室長）

川づくり
～川と向きあうことの覚悟

近藤　朗

今から３年ほど前に、拙文「矢作川との10年、これからの30年」を本誌上に掲載させていただいたが、これは私の原点・矢作川とそれに関わる地域の人々へのオマージュであるとともに、愛知県の河川管理者としての覚悟を示したものである。念願かなってこの春、10年ぶりに豊田加茂建設事務所に赴任できたのであるが、以前と同様、川親父達は元気であり暖かく迎えてくれつつも、目は「覚悟召されよ」と語っている。

唯一、矢作川研究所・田中蕃氏の逝去が無念である。10年以上前、矢作川百々の水制工工事で安易に竹藪や葦原を伐採したことにお叱りを受けるも、同時に復元方法など指導もいただいた。いずれにせよ、ここでは多くの人々に見守られていたことに気づく。

◆ 豊田での多自然川づくり

豊田に復帰後、まずは以前に手がけた多自然川づくりのその後をつぶさに見て回った。当時の手探り・試行錯誤の成果は、10年の時間を経てどのような評価をすべきなのか。

先輩諸氏が手がけた矢作川古鼡水制工は、東海豪雨の洗礼を受け、改良復旧工事も行われた。現在では中州が随分と発達し過ぎているが、今年の台風による洪水で一部が流出、中の玉石層が見え始めた。ここでは洪水による攪乱も必要な要素なのだと認識させられる。

籠川の全段面魚道では、今年の鮎大量遡上にあわせその利用を確認できたが、鮎以外の雑魚に対しても視点がいる。漁協組合長からは、「多自然工事箇所に魚がいない」との指摘も受けたが、最近では刻一刻変動する河床に深みを許容する川づくりが最も重要だと考えており、この点配慮していきたい。護岸基礎の根入れと低水河道の自由度に目を向けるだけで、随分と視野が広がる。

ほ場整備に合わせて改修を進めた仁王川では、コンクリート護岸を使わず堀込むだけの素堀工法を主体としたが、さすがに10年経つと植生も回復し川らしい風景に近づいた。昆虫が多く、魚影も見かけられたが、反省点としては自然石を使いすぎた。とりわけ連続性を確保するため、急流部を自然石によるスロープ構造としたが、距離が長いため魚にはつらそうである。むしろ小落差工群を配置すべきだったろうか。

堤小学校の子どもたちと共に議論を深め、採択した逢妻女川の柳枝工は、「矢作川水族館」館長の阿部夏丸氏より、「ここだけ川が生きている」との評価をいただいたが、現在工事では採用されていない。成長の早いヤナギ類管理の煩雑さによるものと思われるが、少なくとも水際部植生の重要性には目を向けたい。この部分の植生は、環境面のみならず治水上も重要である。ちなみに、この柳枝工は東海豪雨時も被災していない。阿部氏の「川と相談しながら」という提案は、十分身にしみている。

逢妻女川柳枝工

同じく逢妻女川の「水辺の緑の回廊」植樹は10年後大きく育ち、良好な水辺林を形成している区間がある一方、草に覆い尽くされている区間もある。見れば、特定外来生物指定種のアレチウリであり、新たな課題に直面することとなる。

◆ 何故、河川行政の転換だったのか

そもそも、河川環境や地域との関わりに目を向けた新しい河川行政の流れは、平成２年の「多自然型川づくりの推進」通達を契機とし、以後平成９年の河川法改正を経て、大きく転換したのであるが、果たして河川と河川を取り巻く環境は良くなったのか。これは常に問いかけていくべき課題である。

新しい流れに否定的な意味ではない。この間の様々な河川審議会等提言やキーワードは、「生物の多様な生息・生育空間の確保」、「健全な水循環系」、「河川と地域の関係の再構築」、「流域の視点」、「川の365日」、「川に学ぶ」等、河川の本質に関わるものばかりである。平成10年の「パートナーシップによる河川管理に関する提言」冒頭に、私の好きな下りがある。「これまでの河川管理は、頻発する洪水や渇水に対して早急に対応を行う必要に迫られたため、効率の良い画一的な手法が優先されてきた。その結果、地域で育まれてきた川の個性や文化が損なわれてしまう事が多かった。また、水質等の河川環境の悪化により、地域の人々は川と触れあう事が少なくなり、精神的にも地域と川

の関係が疎遠となった。今後は、地域の人々が川に親しみと誇りを持つことができるよう、河川特性、地域の歴史・文化を踏まえた河川管理を行い、川と地域の人々との関わりを再構築する必要がある。（中略）これまでは、河川事業において、市民との合意形成が必ずしも十分でないまま事業が行われ、市民と行政の対立を生じさせていることもある。これからの河川管理にあたっては、それぞれの河川、地域の状況をきめ細かく把握し、情報を適切に公開し、双方理解が得られるまで十分に対話し、合意形成を図ることがきわめて重要である。」と続く。

前提として、河川は本来地域固有の共有財産であり、重要な生活基盤であることを忘れてはならない。提言は、そのような意識や関係が損なわれたことから、様々な問題が生じたのだとの指摘である。「川は良くなったのか」との問いかけに、私はいつも、この反省に立ち返ることとなる。

◆ 河川管理者の覚悟

新たな「多自然川づくり」の推進においては、全ての河川において「多自然」を基本とする事が明記され、画一的な手法に陥りがちな現状に対して警鐘をも鳴らしている。随分と進歩的な内容にもかかわらず、15年前の導入期と比べ反応が鈍いと感じられるのは、行政側の体力不足の問題もあろうか。「多自然故の煩わしさ」という誤解もある。

そうではない。人が勝手に命名した多自然､近自然という概念以前に、川は流水をたたえる自然物であり、その河川管理とは本来煩わしいものなのである。人の思惑とは別に、川の本質は何も変わっていない。きちんと川と向き合うのでなければ、しっぺ返しを受けるのはわれわれの方である。「覚悟召されよ」は、川自身からの問いかけなのであろう。

（こんどう　あきら、
豊田加茂建設事務所 建設第二課 主任主査）

川づくりへの挑戦
～第二ステージの主役をめざして

田宮睦雄

皆さんは「川」と聞くとどんな川が頭に浮かびますか。私は幼い頃、フナやメダカやヤゴなどを捕まえ遊んだ足助の小川が真っ先に浮かびます。近年、特に、このような身近な小川が「悲鳴」を上げています。私が幼い頃遊んだ小川も例外ではなく、今では、コンクリートの排水路に様変わりし昔の面影は全くありません。

このような時代の流れに対し、国は、今から15年程前からやっと「川の悲鳴」に耳を傾け、生き物にやさしい川づくり（平成２年に「多自然型川づくり」と命名）をパイロット的なモデル事業として全国的に展開するようになりました。

一方、豊田市は、昭和53年に「緑を育み、川を大切にして、豊かな自然を愛しましょう。」を最初の一節とする「豊田市民の誓い」を制定しました。既に30年程前から、自然の大切さに気づき、市民の意識の高揚を図ってきた土壌があったからこそ、全国に先駆け、国や県などと連携を図り、矢作川の環境整備や金泉閣周辺の加納川、籠川、太田川などで「多自然型川づくり」の取り組みを実施してきました。これらは幾つかの書物で紹介され、全国から多数の見学者が訪れ、高い評価を得るなど、豊田市は「多自然型川づくり」のリード役を担ってきました。

環境に配慮して改修された加納川

これまでリード役を担い展開してきた取り組みは、自然豊かな川において「保全」を中心とした「多自然型川づくり」を進めてきましたが、いよいよ「川の悲鳴」の中心である身近な川、なかでも豊田市の中心市街地を流れる身近な川の「再生」に取り組みます。

中心市街地を流れる身近な川（準用河川安永川）

これらの川の再生は、これまでの川づくりのように、川が持つ能力が最大限発揮できるよう「きっかけづくり」だけ行えば、あとは川が自らの能力でもって豊かな自然環境を創り出すといった手法（この「きっかけづくり」は河岸整備の技術的な手法としてある程度ノウハウが蓄積されてきた）だけでは不十分であります。

これから挑戦する川づくりは、これまでの川づくりに比べ、「まちづくりとの連携」、「市民との協働」の視点がより重要となります。すなわち、川の整備だけでなく、中心市街地において水と緑のネットワークを構築することにより、互いの整備効果をより一層高め、魅力ある川を軸とし自然の恵みが享受できるまちづくり（川に背を向けたまちからの脱却）の実現に向け、幅広い視野による総合力が重要となります。

また、その実現のためには、計画段階だけでなく、維持管理段階まで含めた市民との協働が不可欠であります。これまでの川づくりでは、立派な「生みの親」になることに一生懸命でありましたが、これからは、川の整備を終えた段階がゴールではなくスタートと意識し、「育ての親」として深い愛情をもって川を育てる姿勢が重要となります。豊田市では協働をあえて共働と表現し、より積極的な市民参画をめざしこれまで実行してきた仕組みがあります。この仕組みを活かし、時には、反抗期があったり、想定外の成長があったりする川に対し、ある程度の自由を与えつつ、川の成長を手助けできる懐の深い共働が必要となります。

私はかつて「河川環境」の研修で、(株)西日本科学技術研究所の福留さんから川づくりが成功したかどうかの評価は、「水ガキ（川で遊ぶ子供たち）」の復活であると教わりました。一日も早く、水ガキの喜々とした声が川から聞こえ、わがまちの顔として自慢できる川の実現に向け、みんなで頭と体に汗をかこうではありませんか。

最後に、「多自然型川づくり」は、昨年、これまでの川づくりの評価を終え、モデル事業のイメージを払拭するため「多自然川づくり」へ名称を変え、第二ステージに突入しました。豊田市では、第二ステージにおいても、今回の川づくりを通じ、リード役として全国に情報発信していきたいと思います。

（たみや　むつお、豊田市河川課 主幹）

表紙の写真

全国的に評価の高い

矢作川古鼡水制工

自然石を使って水の流れを川の中央に向け低水河岸の保護を行い、あわせて流れに変化を持たせて瀬と淵、浮き石、空隙などを有する多様な河川空間を創出。治水と水生生物の生息に適した環境づくり、風景の調和も図られています。

2007年8月（近藤 朗氏　撮影）

後記

今号は、国、県、市の河川技術者に執筆していただきましたが、明確に川づくりの方向性を同じくして、アプローチの仕方の違いとそれぞれがその役割を担ってよりよい川づくりに向かっていることが良く分かります。

森岡さんが言われるように矢作川は、関係団体や市民の議論が活発に行われその環境が保たれてきました。しかし一方で、今春、矢作川は大量の天然アユが遡上しましたが、これまでのところ釣果はさっぱりです。自然は未だ計り知れないことが多く、私も技術者の端くれとして、物言う住民と物言わぬ自然の声をよく聞き幅広く勉強をしていかなければならないと思います。（宮）